

白選五十一首



竹山 広

傷軽きを頼られてこころ慄ふのみ松山燃ゆ山里燃ゆ浦上天主堂燃ゆ「とこしへの川」

水のへに到り得し手をうち重ねいづれが先に死にし母と子

橋下に死してひしめくひとりひとり面おこし見てうち捨てゆきつ

くろぐろと水満ち水にうち合へる死者満ちてわがとこしへの川

水を乞ひて捧ぐるもろ手あとさきのなき白昼のひとつまぼろし

死屍いくつうち起こし見て瓦礫より立つ陽炎に入りてゆきたり

積みあげし死体に移りゆかむ火をふたところより人はつけしか

人に語ることならねども混葬の火中にひらきゆきしてのひら

この坂のここにこときれゆきたりしひとつの顔をのがれつづけつ

死の前の水わが手より飲みしこと飲ましめしことひとつかがやく

追ひ縋りくる死者生者この川に残しつづけながきこの世ぞ

最初の歌集「とこしへの川」を出したの

が昭和五十六年、六十一歳の時であった。歌集に収めた四九五首は、昭和三十年以降、二十五年間に作りえた作品のほぼ総数である。歌集を編もうとして、結社誌に発表した数少ない作品を拾いながら、こんな歌集を出すのかと絶望に近い思いを味わったことを憶えている。もともと、人に勧められるまで、歌集を出す気が全くなかったのである。

昭和十六年、しっかり歌を作ろうと思つて「心の花」に入会し、敗戦までの数年間、手探りでかなりの歌を作った。

昭和二十年八月九日、長崎に原子爆弾が投下され、私自身は辛うじて死を免れることができたが、それまでの作品はすべて灰

被爆時の記憶さへ妻と相たがふ三十五年念念の生

浄き死をかならず死なむある夜よはの覚悟の如きものたちあがる
てのひらに頭かぶをおけばうら悲しとはとこしへと国を学びき
安堵してわれは眠りぬみづからの齡よばを妻にたしかめしのち
噴水を終りたる夜の泉にて苦役のごとし水の繋るは

戦争をにくしむわれら戦争をたたへしごとくには激しえず
地を擦りて必中の核進むとぞながらへてかかるものに絶句す
父の日といふはづかしき日のありて昼の豊に酔ひ伏すわれは
おそろしきことぞ思ほゆ原爆ののちなほわれに戦意ありにき
高窓にしばらく翳りたる月のもどりて何もなし一生は

髪触るるまで子の墓にうなかぶす妻のうしろに寄りゆきがたし
戦争に手を振りし身の置き処なきにもあらずこの世たのしけ
原爆の死を傍観し来しものに死はありふれておそろしく来む
青暮るる水無月の天歲月の跡なきものもいち日終る

ながきながき昭和窮りし寂けさやことりとパンを出すトースター
妻は妻の灯に安らへよわが点す灯はみづからに降りゆかむため
白雲をおし上げてゐる白雲のかがやける白海をはなれつ

人生はこれからと思ひゐるものらスニーカー白く路上をわたる
チエルノブイリに四度人なき秋あらむ語らぬことを思ふしばらく
おほいなる天幕のなか原爆忌前夜の椅子らしづまりかへる

〔葉桜の丘〕

〔残響〕

〔一脚の椅子〕

になり、その後十年間、全く歌が作れなかつた。

作歌の再開は昭和三十年、結核の悪化により入院を余儀なくされてからである。この入院生活の早い時期に、『とこしへの川』冒頭の原爆体験詠五十六首を一気に書き上げた。この一連は、戦後まもなく数首を作ったものの、夢に脅かされて作りつぐことができず、十年間心にとめたままになっていたものである。

『とこしへの川』には、ほかにも原爆を数多くうたっているが、それらが持続的な作歌に繋がっていないのは、生活困窮のため歌に向かう心の余裕がなかったからである。

休み休み作り続けた歌も、昭和四十年代は殆ど中断に近い状態であった。やむを得ないことではあったが、かりに当時、歌集を出そうという目標があったとしたら、もう少しは作歌に精を出していたはずである。その後の四冊の歌集が、すべて四年から五年おきに出ていることを思うと、『とこしへの川』だけが格別難産の末に生まれたことに感慨を抱かざるを得ない。同時に、もっとも真剣に生きつづけた中期から壮年期にかけての生の軌跡を、作品の上に刻むことができなかった口惜しさを拭いきれないままである。(たけやま・ひろし「心の花」)

一睡ののちのたふとき一睡を終れば高き月ありにけり
三人子をわれは遺さむうまごやしきまだ美しく濡るる地上に
或ところわれ居りてまた或ところわれ居りたりしのみ青春は
死をのがれ来しこと天の意にて白妙ヒメミひらく朝朝の沙羅
卓上にのぼり花瓶にのぼりたる蟻よ落胆せず降りてゆけ
一分ときめてぬか俯す黙禱の「終り」といへばみな終るなり
をさなごの氷菓を舐むるながき舌爆心塔の陰より出でく
この川の水に重なりたる死者一日おもひ一年忘る
ごみのなきごみ出し場月に明りある地上平和のときのさびしさ
寸心をなほ蔵へれば冬川の涸れたる岸をさかのぼりきつ

「千日千夜」

今生の別れみじかく言ひ合ふに標準語もて姉のいふかも
羊雲たかだかと暮れ椅子の上のころはながく死者を伴ふ
万歳と声を揃へてさし上ぐる腕にさびしきつけ根ありたり
暗き奥になほ奥ありて戦きしオウムのことも過ぎて茄子垂る
二万発の核弾頭を積む星のゆふかがやきの中のかなかな
父ありし母ありしさへうち忘れ罪深きものはその齡越ゆ
なきがらの齒の美しと悲しみしことありしかど誰が齒なりけむ
さくらよりさくらに歩みつつおもふ悔恨ふかくひとは滅びむ
われの死がかずかぎりなき人間の死になるまでの千日千夜